



学園町が「住まいのまちなみ優秀賞」受賞 武蔵野のよさを残すまちなみの維持と 豊かなコミュニティ形成が評価される

「学園町」が、「第18回住まいのまちなみコンクール」で「住まいのまちなみ優秀賞」を受賞しました。一般財団法人住宅生産振興財団などが主催し、国土交通省などが後援しているコンクールで、学園町自治会が応募。「住民と自由学園が協調しながらコミュニティを形成し、武蔵野のよさを残すまちなみを維持している」とことと「2008年に学園町憲章を制定し、住民が地域の理念を共有している」ことが評価されました。学園町が誕生してから間もなく100年。先人たちの「学園町の環境を維持しよう」という努力が今回の受賞に結実しました。今後3年間にわたり、年50万円の賞金が授与されます。

「住まいのまちなみコンクール」の趣旨について主催者側は「日本では人口の減少等を背景に、様々な社会的課題に対応した多世代が住み継ぐことができる価値あるまちなみの形成が求められており、このようなまちなみの形成には、地域の方々による、継続的な維持管理、運営、コミュニティの形成等の多様な取り組みが必要となる。その

活動に取り組む住民組織の皆さまをまちづくりのモデルとして表彰し支援するとともに、これらの取り組みを各地に広げていく」としています。

審査委員会（審査委員長・大月敏雄 東京大学教授）による厳正な審査の結果、「学園町地区」が「住まいのまちなみ優秀賞」に輝きました。以下にその受賞理由の詳細を紹介します。

◇ 「自由学園がこの地にまち開きをしてから約100年間、住民と学園が協調しながらコミュニティを形成し、武蔵野のよさを残すまちなみを維持している。2008年に学園町憲章を制定し、地域の理念を改めて共有した。現在、元学生寮を拠点とし、食堂、子育て支援等の活動を展開。コミュニティづくりの専門家や地域史の研究者が深くかわかることで、まちづくりの新たな機運が高まっている。」

大月委員長は、「昨年審査のために訪れましたが、住まいと武蔵野の風土が一体となった環境がよく残っていると感じました。志のある住民の活動によるものと思います。自由学園の精神が100年もの間、このまちに受け継がれていることに驚きます。これほど学校と地域が連携しているところは他にありません」と述べています。（1月15日の講演会「学園町誕生100年」の挨拶より。講演会については2面に詳細）

参考までに、「国土交通大臣賞」には東京都板橋区加賀一・二丁目地区が選ばれました。加賀前田藩の下屋敷跡地に築かれてきた集合住宅中心の街ですが、大規模マンションの建設を契機に、各専門分野の地域住民が中心となって事業者とともにまちづくりに継続的に取り組みました。具体的には、事業者からマンション敷地の境界部分の土地を地域のために提供してもらうことで、まちを散歩するのが楽しくなる通路や、公道をつなぐ生活通路等を巧みに生み出しました。そして、まちに広がる緑あふれる歩道や広場などが人々の豊かな活動の場となっています。

また、「住まいのまちなみ優秀賞」には、学園町のほかもう一つ千葉県市原市の「スマートコミュニティちほら台」も選ばれました。開発業者から住民へ運営体制が早い段階で引き継がれ、住民が主体となって住民の意見の集約や会議システムの構築を進めています。学園町でも、世代交代に伴う相続税の問題などから、開発業者が入り、これまでの戸建て住宅を区画整理して分譲

したり、マンションを建設するケースが見られるようになりました。板橋区加賀地区や千葉県市原市の取り組みは、私たちの学園町にも参考になることでしょう。

どのようなまちづくりをしていくのかは、これからの重要な検討課題ですが、こうしている間にも、まちの開発は急速に進んでおり、「学園町憲章をより浸透させ発展させることや、近隣の不動産屋さんと連携を強化すること」などは喫緊の問題でもあります。学園町自治会の人見会長は「この受賞を機に、先人が築き守ってきた学園町を、より住みやすいまちにするために住民の皆様と一緒に活動を進めていきたい」と話しています。

自由学園からの お知らせ

■ 幼児生活団幼稚園園庭開放

2月15日(水)、22日(水)、3月2日(木)、16日(木)、23日(木) いずれも10:00～11:00 各回10家庭

■ 初等部学校見学日(校内展覧会美術)

2月17日(金) 10:00～11:00

■ 初等部アフタースクール説明会

3月18日(土) 9:30～10:30

■ 男子部・女子部春の体験教室

3月25日(土) 中等科・高等科入学希望の方へ様々な体験教室を行います。

※以上の催しについて詳細は自由学園のホームページに掲載しております。

※お問合せ先・自由学園広報本部

TEL042-428-2122

e-mail: kh@jiyuac.jp

URL: https://www.jiyuac.jp

講演会「学園町誕生100年」を開催 学園町の歴史と価値について 玄田悠大氏と荒昌史氏が語る

2025年、学園町は誕生から100年を迎えます。学園町自治会では2008年に学園町憲章を制定するなどまちなみの維持に努めています。そうした活動の一環として1月15日、自由学園記念講堂で「学園町誕生100年」と題する講演会を実施しました。学園町の住民はもとより、他の市町の住民やまちづくりの専門家や関係者ら計160人が参加、この町のよさを改めて認識するとともに、住環境が急速に変貌を遂げるなかで、いかによい環境を維持していけるかを考えるきっかけになりました。

講演は、自由学園と株式会社婦人之友社、全国友の会が協賛。独立行政法人国際交流基金職員で、東大大学院博士課程「都市デザイン研究室」の玄田悠大氏が「研究者が見た学園町の歴史」、HITOTOMA代表でネイバーフッドデザイナーの荒昌史氏が「専門家が見た学園町の価値」と題して講演しました。

学園町は、1924年、自由学園が目白から移転する際に学校用地と併せて住宅用地として10万坪を入手したのが始まり。創立者羽仁もと子・吉一夫妻は雑誌「婦人之友」誌上で「新しい町づくり」を発表、雑誌購読者や「全国友の会」、自由学園保護者に分譲し、学園都市「学園町」が誕生しました。

玄田氏は、英国から入ってきた「田園都市」の概念と大正新教育運動から説き起こしながら、学園町の形成について解説。どういう地域を作りたいかという考え、すなわち「地域形成理念」が重層

的、段階的に展開され、学園町らしいコミュニティや建築空間ができてきたと説明します。

また、この町は誕生当時の思想を現在でもうまく受け継いできましたが、近現代に形成された地域では、良質なまちなみや建築の消失が危惧され、その対応が喫緊の課題あると述べました。

荒氏は、ご自身が取り組んだ旧ひばりが丘団地の「まちにわびばりが丘」について紹介。団地のテラス棟を改築した「ひばりテラス118」でのイベントや住民交流の様子を話しました。次いで、自身が学園町に転居してきた理由や住んでよかったことについて言及し、住んでから分かったこととして、「開発のスピードがとても早く、学園町憲章に沿っていない開発もある」「まちなみに関して、想像していたよりも継承の動きが少ない」ことなどを指摘しました。これらを踏まえ、学園町が「21世紀を代表する魅力ある町」であるための今後の取り組みについて語ってくれました。

最後の質疑応答では、「今こそ次の世代につなげるまちづくりへの道筋をつける時期である」といった期待の声が寄せられました。また、来賓の大月敏雄東京大学教授から「学園町は『ガクエンマチ』なのか『ガクエンチョウ』なのか、どちらでしょう」という問いかけがありました。皆さんは普段、どちらを使っていますか？

南部地域センターからのお知らせ

※只今、3月中旬まで、ロビーで南部手芸の会の皆様が作った「つるし雛」を、また地区センター入口では「雛段飾り」も展示しています。是非ともご覧ください。

★「ヨガ教室関係①〜⑤」

①「夕方YOGA教室」(金曜クラス) 2月17日、3月3日、10日、17日、4月7日 17:30〜18:30。参加費500円。定員10名。持ち物等・動きやすい服装・首にかけられる長さのタオル・飲み物。講師・ヨガインストラクター健康運動指導士 中村陽子

②「ヨガ男塾」 2月17日、3月3日、3月10日、17日、4月7日 19:00〜20:00

③「夕方YOGA教室」(火曜クラス) 2月14日、21日、28日、3月7日、14日、28日、4月4日 17:30〜18:30

④「日曜ヨガ教室」 2月19日、3月19日、4月2日

⑤「健康体操」 2月19日、3月19日、4月2日

※上記②、③、④、⑤の参加費、定員、講師については、いずれも①と同一。

★人生のお金勉強会シリーズ 第1回「住宅ローン勉強会」 2月12日、3月12日 13:30〜、参加費 無料(要事前予約) 定員10名

★ベビーマッサージ 2月13日、3月13日、4月10日 10:00〜

12:00 参加費2000円。生後2か月〜1歳前後の赤ちゃんともまさん・妊婦さん

★バクさんとその仲間と音楽と 2月26日、3月26日、開場13:15 13:30〜15:00

★60歳からの音楽で脳トレ体操 2月27日、3月27日、10:15〜11:30 定員10名。参加費1000円

★妊婦さんとママのためのところとからだのセルフケアレッスン 2月27日、3月27日 10:00〜11:30 定員8名(親子参加は4組まで) 参加費500円。妊娠中の不安な気持ちを共有したい方、子育ての悩みを共有したい方、マタニティライフをナチュラルなケアで過ごしたい方

★ひばりが丘団地「みんなの居場所」高齢者の気軽な居場所(東久留米第二層協議体会議課題) 3月2日、31日 13:30〜15:30 参加費無料。定員10名

対象者 近隣住民、高齢者

★なんぶおしゃべりサロン 3月5日、4月2日 13:30〜15:30 参加費1000円・定員10名

★えいごであそぼう 3月25日

【幼児クラス】 13:30〜14:30

【小学生クラス】 15:00〜16:00

参加費1000円(教材費を含む)

※各イベント問合せ

南部地域センター(指定管理者 ㈱セイウン) 042-451-2021

Higashikurume_nanbu@s-seiun.co.jp



玄田悠大氏



荒昌史氏

齋藤奨太さん、京子さん夫妻の
ビアレストラン 21Brew Cave
障がい者に働く場所を提供したい

西武池袋線ひばりヶ丘駅南口からバス通りを田無方面へ10分ほど歩くと左側にしやれたビアレストランが出現します。「21Brew Cave (ニーチブリューケイヴ)」です。多彩なラインアップのクラフトビールが評判の店を切り盛りする齋藤奨太さん(38) 京子さん夫妻は学園町2丁目在住です。保育士の奨太さんが店をオープンしたのは約1年前。これまでの経歴とはまったく異なる道を歩み出したのはなぜか。そこには障がいを持つ息子さんの存在がありました。

◇ ◇

齋藤さん夫妻が埼玉県草加市から学園町に引っ越してきたのは今から14年前。元々京子さんの実家が学園町だったのでお嬢さんが小学校を上がるのを機にやってきました。奨太さんは引っ越す前は幼稚園教諭をしており、こちらでは保育園に勤務しました。



ビアレストランを始めたのは、クラフトビールを飲むのが大好きだったということに加え、ダウン症の息子さんの働く場所を作りたいというのが動機でした。「障がいを持った人たちが役割分担してブドウを育てたり、ワインを醸造しているワイナリーがありました。それを知ったとき、自分の好きなクラフトビールの世界でそういつたことができるのではないかと考えました」と奨太さん。「息子だけでなく、障がいを持った方々に興味をもって働ける場所と仕事を提供したい。この店を核としてコミュニティが作ればいいですね」。

京子さんは「障害をもつ子どもたちの雇用役に立つのなら全面協力しようと思いました。今は無我夢中という感じですが、食事作りを楽しんでいます」と話します。「21Brew Cave」がオープンしたのは、2021年12月。店名にある「21」はオープン年にちな

今年もかわら版を
よろしくお願いいたします



んでつけたのではなく、ダウン症は21番目の染色体の異常により起こるので店名に21を入れたかったとのこと。オープンまでの3年間は、浅草のクラフトビールの醸造・販売店で修業、さらにイタリア料理のレストランで料理を学び、本業の保育士の仕事もこなす

という3つの職場を掛け持ちする忙しさでしたが、夢実現のために頑張りました。

めまます。アルコール度がちよつと高い苦みの利いたものから、果物を使用したフルーティなもの、アルコール度が低めでさわやかな飲み口のものなど多彩な種類を用意しています。元々クラフトビールは生産量が少ないので在庫が限られており、お客さんは「今日は何

が飲めるかな」という楽しみもあります。また、瓶や缶も購入できるのでお土産としても利用できます。

恒例の学園町在住の紙工作作家・ごとうけいさんの干支の作品です。「エゾユキウサギ(夏毛・冬毛)」を作りました!クラフトではかわいらしくデフォルメしていますが、四肢がスラッと伸びたカッコ良いうさぎです。破魔矢をあしらったお年賀うさぎもどうぞ。

今年は3月15日(水)〜5月7日(日)、港区立みなと科学館で『いきもの大図鑑(仮)展』が開催されます。そこで、大きなペーパークラフトの展示や紙工作ワークショップを行います。

17番目の寄港国。パナマ

篠宮 晴子

世界を巡るピースボート北回りの旅も、横浜出航から80日が経った。このかわら版での連載も5回目である。今回紹介するパナマは17番目の寄港国。ただ治安が悪く街に出ることはできなかった。クリストバルという港の建物の中だけでの滞在だった。港に着岸する時、建物の脇で洗面器からスプーンで何か食べている女性達がいる。最初見た時はギョツとしたが、洗面器はプラスチック製だから、意外と丈夫で衛生的かもしれない。

大きすぎる葉巻

建物の中の葉巻店は圧巻だった。教室一つ分の大きさで商品はすべて葉巻。太さ、長さ、葉巻についている帯のデザイン、ばら売



り・箱売り、そして香り。種類は様々で、見た目も美しく優雅だ。一本買ってみたくなったが、自分の小さい手に持つてみると、余りに大きい。ちぐはぐ過ぎて、やめた。

パナマでも高いパナマ帽

雑貨屋さんの一角でパナマ帽が売られていた。編んだ目が細かく、仕上がりがしつとりしていて手触りがとてもいい。日本で買えばものすごく高そう。そんな素晴らしい帽子が、100円で買えるお菓子と並んで売られていた。でもやっぱり高かった。

絵になるコロナビール

軽食屋さんの外のテーブルで、コロナビールを飲んでいる人がいた。瓶の口にはカットしたライム。コロナビールを写真で見たことはあったが、現地で見るとは初めて。透明の瓶に、ラベルは上半分が白で、下半分が黒。そこにライムの緑色がさし色のように入る。大人の配色で実にかっこいい。

運河航行は好き？

パナマと言えばパナマ運河。教科書にも載っていた。運河航行を最初から最後まで見ていた夫に作業の様子を聞いてみた。

「船は、両側のトロッキに引かれながら3回開門で上昇して、また3回下がって、ようやくカリブ海から太平洋側へ出た」

開門とは、運河などで高低差のある水面で、船を昇降させたり、水量を調整したりする装置のある水門のことである。

「見ていて面白かった？」

「いや、特に。他にやることなかったから見ていただけ」

てつきり興味深々だと思っていた。でも船の甲板で最後まで見ていた人は、思いの他少なかった。私は船内をうろろし、時々見る程度だったが、教科書に載るくらいだから沢山の人が最後まで見ると思っていた。でも殆どの人が船内で企画されている麻雀、将棋、卓球、ヨガなどに忙しかつた様だ。

明かりのつかないビル群

この運河航行中に船の一部が破損してしまった。その部分は予備の備品で即修理は出来た。しかし航行を続けるには、交換した部品と同じものを、予備として新たに装備しなければならぬ。部品到着までパナマ運河を出たところで停泊することになった。

パナマ市が遠くに見えた。高層ビルが林立する大都会だ。だんだん外は暗くなっていくが、それらの建物に明かりが点いている様子がないのだ。まるでゴーストタウンのようで背中が寒くなった。

東海道五十三次完歩しました その⑪

2丁目 藤田義子

●第20回8月31日～9月1日

見附宿―浜松宿―舞阪宿 27.5km (51000歩)

JR磐田駅前をスタートして熱中

症の用心をしながら5キロほど歩くと天竜川。豊富な水量で豪雨の度に洪水となり村人を悩ませ「暴れ天竜」と言われた川の、今日の穏やかな流れを見つつ新天竜橋を渡り右に左に曲がる複雑な階段を降りると中野町だ。

むかし洪水で悩まされたこの町も明治時代以降は水流を利用して上流から木材を筏に組んだり鉾石を帆掛け船につんだりしてここで陸揚げし、川魚の漁や砂利の採取などで暴れ天竜は恵みの川となり町は大変に栄えた。

前回の記事で、袋井宿に「ど真ん中茶屋」とか「真ん中小学校」があったと書いたが、見附宿のこの中野町も真ん中だから「中のまぢ」なのだという。十辺舎一九の東海道中膝栗毛にも「船よりあがりて立場の町にいたる。ここは江戸へも六十里、京都へも六十里にてふりわけの所なれば中の町といへるよし」とあるそうだ。

明治元年、度重なる災害に悩むこの町のために全財産を投じて水源地に植林するなど治水事業に力を尽くしたのが「金原明善」である。その彼の二百年前の生家が補

修を終えて一般公開されていた。どつしりと立派な屋敷の部屋で御下賜の金杯、銀杯、愛用の鞆、伝記本などを見て回った。

板塀や門かぶりの松などが並ぶ中野町の街道風景を味わいつつ浜松宿に入る。浜松宿は自然石をつみあげた石垣の上にそびえる浜松城の城下町として発展し遠江の中心となった。

きっかけは家康が引間城を浜松城と改名し居城を岡崎から浜松に移したことによる。ところが明治7年(1874)の大火で宿の三分の一が焼け、先の戦争の空襲で町割りや景観はすっかり失われしまったのだという。

これは渡されたプリントの文章だが何処を見てもそんな傷跡は全然見られない。鉄道の引き込み線の跡を緑の散歩道とした「堀留ポッポ道」では初期の国産機関車「ケ91タンク機関車」という巨大な機関車を見た。鉄道マニアであつたら垂涎ものだろう。

舞阪宿に向かう道は浜名湖の弁天島へ延々と松並木が続く。3キロ程の間に四つの違う名の神社があった。明応の大地震(1498)で陸が決壊し、浜名湖が遠州灘とながった恐怖心の所為だろうか。こうして、「弁天島」でゴールした。